



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	李賀と沈亜之
Author(s)	野口, 一雄
Citation	北海道大學文學部紀要, 28(2), 107-169
Issue Date	1980-03-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33440
Type	departmental bulletin paper
File Information	28-46_PR107-169.pdf



李
賀
と
沈
亜
之

野
口
一
雄

李賀と沈亜之

野口 一雄

序

元和の変 唐・李肇はその「唐国史補」⁽¹⁾に於て、中唐・元和期の文学状況を総括して次の様に述べている。

元和以後、爲文筆、則學奇詭于韓愈、學苦澁于樊宗師。歌行、則學蕩于張籍。詩章、則學矯激于孟郊、學淺切于白居易、學淫靡于元稹。俱名爲元和體。大抵、天寶之風尚黨、大歷之風尚浮、貞元之風尚蕩、元和之風尚怪也。

この時期が文学史上、元和の変と通称される時期である。鬼才を以て称される李賀の作家活動は、元和年間の、主に七・八・九の三年間に集中している。李賀こそまさしく元和の落し子の作家といえるであらう。

李賀詩の理解 李賀の詩風はなほだ独特なものと思われてきた。例えば劉大杰氏は次の様に李賀を紹介している。⁽²⁾

《新唐書・文藝伝》説他：「辞尚奇詭、所得皆惊邁、絶去翰墨畦径、当时無能效者。」正因如此、李賀的詩風能独成一派、前人称为長吉体。

李賀が「独り一派を成した」とするのは、劉氏を含めて通説となっている様に思われる。小論の狙いは、怪奇を以

李賀と沈亜之

て喧伝される李賀の詩風が、この元和期に於てどの様な位置を占めるかを検討する点にある。

最初の李賀論ともいべき杜牧の「李賀集序」(「樊川文集」卷十)で、李賀の詩のある一群は「牛鬼蛇神」と評されており、以降これが李賀詩の主要な一面とされてきたのであった。今、李賀の怪奇を以て喧伝される詩風を検討する際、代わるべき適当な用語に思い至らぬまま、姑く杜牧の語を借りて蛇神詩と呼ぶ事にする。テキストは北宋刊本⁽³⁾に據り、改めた場合には注記した。

目次

- 一 李賀の蛇神詩
- 二 李賀の時代
- 三 呉興の沈氏
- 四 結語

一 李賀の蛇神詩

蛇神詩の分類 検討に入る基礎作業として、李賀の詩集中いかなる詩群が蛇神詩に範疇づけられ、またそれらの詩群はどの様な世界を構成しているかをまず眺めておこう。

① 詠仙界詩

あくまで玲瓏透徹な天上世界を描写した一群の詩がある。卷一から「夢天」を引こう。

夢 天

1 老兔寒蟾泣天色

雲樓半開壁斜白

玉輪軋露濕團光

4 鸞珮相逢桂香陌

黃塵清水三山下

更變千年如走馬

遙望齊州九點煙

8 一泓海水杯中瀉

この詩群に顯著な特徴は、あくまで傍觀者としての目で敘述する作者の姿勢である。同じく仙界を詠じて、例えば李白の様に、仙界にみずから入りこみ玉女達と宴するのとは全く相を異にしている。「遊太山六首、其一」(「李太白文集」⁽⁴⁾卷十七)には云う。

天門一長嘯

16 萬里清風來

玉女四五人

飄飄下九垓

北大文学部紀要

李賀と沈亜之

含笑引素手

20 遺我流霞杯

“太白幻語、長吉濫觴”とする批評は吟味され直す必要がある。李賀の仙界は、李白の仙界の如く活動的に息づかず、金属的な堅さと冷たさを持ち、全く人間臭のしない無機質の世界なのである。

また韓愈の場合でも、

1 夜夢神官與我言

2 羅縷道妙角與言……

13 神官見我開顏笑

14 前對一人壯非少（「少昌黎先生集」⁽⁵⁾卷七「記夢」）

と、作者と仙界との交流は保たれている。

李賀の仙界は人の侵入をはばむ世界であり、傍観しうるのみの世界であるが故に、ふと目ざめた時、李賀の視点が仙界めがけて昇りつめた速さに比例して下界に落ちてゆく他なく、詠嘆におわる結果となるのである。

「夢天」の他に、卷一「天上謠」、卷二「感諷其五」、卷三「仙人」、卷四「日出行」「瑤華樂」「北中寒」などがこの群に属す。このうち、「感諷其五」「北中寒」の描く世界は天上世界そのものではないが、人界を隔絶した仙境を彷彿させる点でやはり同じ群である。

② 楚辭的幻想世界

「楚辭」と李賀とのかかわりについてはすでに指摘がある。「楚辭」が蛇神詩の榮養分のひとつになっている事は

疑いがない。李賀の楚辭世界は更にふたつに細分されるであろう。

2-1 人神交歓の世界

この世界の舞台はあくまで地上にすえられる。天上仙界の詩群と異なり、李賀の幻想はここでは何かぬめぬめした陰湿な肉感を帯びる。色彩にもまた、濃い原色がまじえられる。「九歌」と同様に、人と神とは遂にとげられぬものの様である。

神絃曲

1 西山日没東山昏

旋風吹馬馬踏雲

絃盡素管聲淺繁

4 花裙萃蔡步秋塵

桂葉刷風桂墜子

青狸哭血寒狐死

古壁彩虬金帖尾

8 雨工騎入秋潭水

百年老鴉成木魅

10 笑聲碧火巢中起（卷四）

この群には他に、卷一「帝子歌」「湘妃」、卷二「感諷其三」、卷四「巫山高」「神絃別曲」「神絃」などが挙げら

李賀と沈亜之

れる。

2-2 招魂に類するもの

李賀は己を人間の悪意に囲まれ、途を失った迷魂と意識していた。この人の世は悪意と蹉跎とにみちみちる……李賀にはそうおもわれてならなかった。彼のペシミスティックな人生観が集約的に現れた一群である。

9 我有迷魂招不得（卷二「致酒行」）

10 中藏禍機不可測（卷四「艾如張」）

1 公乎公乎、提壺將焉如（卷四「簇筵引」）

それに卷四「公無出門」などの諸篇は、己もまた迷える魂の一人たる李賀自身への鎮魂のうたとして解する事も可能である。

公無出門

1 天迷迷、地密密

熊飴食人魂

雪霜斷人骨

4 嗾犬狺狺相索索

舐掌偏宜佩蘭客

帝遣乘軒灾自息

玉星點劍黃金輓

8 我雖跨馬不得還

歷陽湖波大如山

毒虬相視振金鏤

狡狴狻猊吐噀涎

12 鮑焦一世披草眠

顏回十九鬢毛班

顏回非血衰

鮑焦不違天

16 天畏遭銜齧

所以致之然

分明猶懼公不信

公看呵壁書問天

楚辭と李賀 「楚辭」の世界の後裔とはいふものの、しかし、李賀が継承しえたのは「楚辭」の中でも上述の二系のみの如く思われる。激しいいきどおりを、答えを期待しえぬままに詰問の形でたたきつける「天問」の系統や、己の屈せる想いを天帝に開陳する「離騷」の型は見られない。李賀という男は、己の想いを堂々と陳述したくもみずからようせず、酒に酔うてはただわけもなく、「二十男兒那刺促」と、「浩歌」（卷一）するだけなのである。いつも内にこもって陰気に不平をつぶやくのみなのである。詩人はつまるところ己の素質に合わせてしか先行する文学遺産を

李賀と沈亜之

えらびとりえない。その一例を李賀にも見出すことが出来よう。

せいぜい、

9 壺中喚天雲不開

10 白雲萬里開淒迷（卷三「開愁歌」）や、

12 闔扉未開逢猧犬（卷二「仁和里雜叙皇甫湜」）などの断片がかりうじて「離騷」を想わせ、また卷四「長平箭頭歌」に「国殤」の雰囲気をかぎつける事が出来る位なものである。卷三「苦昼短」、卷四「日出行」等の「天問」にも似た難詰の重畳は、実は、李賀の時のうつろいへのあせりと、人寿永遠なれとの願望を逆接的に表現しているにすぎない。

しかしまた、不幸な時代に生を養わざるを得なかった不遇な知識人の一人として、彼もまた、その願望の無意味さを充分すぎる程知覚していたのでもあり、この己の主観的願望と、理性的な醒めた視点との自己の体内での衝突・せめぎあい、時代をこえて現代の我々につながる所以でもあるのだらう。先に指摘した李賀の仙界の無機質性と、この「楚辞」から取ったものと取らぬものとが交錯した処に、蛇神詩の詩人・李賀の真面目が浮かび上るに違いない。

③ 架空題によるもの

蘭香神女廟

1 古春年年在、閑緑搖暖雲

松香飛晚華 柳渚含日昏

5 沙砌落紅滿 石泉生水芹

幽篁畫新粉 蛾綠橫曉門

9 弱蕙不勝露 山秀愁空春

舞珮剪鸞翼 帳帶塗輕銀

13 蘭桂吹濃香 菱藕長莘莘

看雨逢瑤姬 乘船值江君

17 吹簫飲酒醉 結綬金絲裙

走天呵白鹿 遊水鞭錦鱗

21 密髮虛鬢飛 膩靨凝花勻

團鬢分珠窠^(c) 濃眉籠小唇

25 弄蝶和輕妍 風光怯腰身

深幃金鴨冷 奩鏡幽鳳塵

27 踏霧乘風歸 撼玉山上聞 (卷四)

杜蘭香說話によせる李賀の興味は大きかった。卷三「昌谷詩」にも蘭香神女廟を詠じた部分がみられる。他に、卷一「蘇小小歌」、「李夫人」、「湘妃」、卷四「貝宮夫人」などは同じ性質の作品群である。

神祀像や墓陵などから詠い起こされるこれら一連の作に特徴的な事は、詩人はまるで眼前の詠物に焦点を合せていないという事である。たまたま立ち寄った祀冢に触発されて、彼女らの悲恋を、実は己の不遇と映像を重ねつつ詠うのであるが、その時、李賀の筆は大幅に幻想による飛躍を行うのである。

李賀と沈亜之

勿論、写生詩でない限り、いやたとえ写生詩であっても、全て詩は想像の産物なのではあるが、それにしても眼前の神像にみるみるうちに血が通い生動しだすという幻想には目ざましいものがある。

李賀の幻想 この時、想像と幻想とは全く別のものとなる。想像力とは現実の上にたって現実と何がしかつつ関わりながら想いを拡張・発展させる思考能力の謂であり、私がここにいる幻想とは、あこがれ出づる魂が現実のほころびのはざまにふとみとめた徒花のひとひらにもたぐられよう異次元世界への飛翔能力なのである。否、飛翔能力というより、或いは、透視能力といった方がよい。この時、詩人の眼は、憑かれた巫の如く、みえぬものを現実のうちにしかとみてしまうのである。

李賀の幻想は、時間・空間の枠を超えて飛翔する。というよりは、時間・空間の壁のいずれをもつき破る、といった方がより正確であるかもしれない。長吉体の代表とされる「蘇小小歌」にこれが典型的にあらわれている。

蘇小小歌⁷

1 幽蘭露、如啼眼

無物結同心、煙花不堪剪

5 草如茵、松如蓋

風爲裳、水爲珮

9 油壁車、久相待

冷翠燭、勞光彩

13 西陵下、風吹雨

李賀には、何も眼前に祀家が存在せずともこれらの作がありえたのであり、大胆な想像をするなら、実はそうであったかも知れない。或いは淫祠かとすら連想させる、全て女冠にかたよった詠題ばかりでこれら一連の作がある事の納得がそれでゆく。あえて架空題と分類つけた理由である。

蛇神詩の奇想性 これまで分類つけてきた蛇神詩に於て、李賀の取りあげるテーマそのものは他の詩人と比してずばぬけて特異なものではない。ただ、それを豊かな想像力を発動する事により無限にふくらませる点に彼の特徴がある。李賀の詩が詩的幻想に富む例は、上述した三つの詩群、ことに架空題の詩群に典型的であるが、何もそれだけに限定されるものではない。巻四「溪晚涼」をみよう。

溪 晚 涼

1 白狐向月號山風

秋寒掃雲留碧空

玉煙青濕白如幢

4 銀灣曉轉流天東

溪汀眠鷺夢征鴻

輕漣不語細游溶

層岫廻岑復疊龍

8 苦篁對客吟歌筒

これは確かに実景ではない。秋溪を詠んだ詠景の詩であるかもしれないが、実景を詠んだのではないと感じられ

李賀と沈亜之

る。卷四「長平箭頭歌」は、李賀二十五才の秋、潞州に友人の張徹を頼つての途次、秦の白起が兵卒四十万を坑うめにした古跡を吊つた作と解されているが、

7 風長日短星簫簫

8 黒旗雲濕懸空夜

左魂右魄啼肌瘦

酩酊倒盡將羊炙

蟲棲雁病蘆筍江

12 廻風送客吹陰火

といった句は、すでに人鬼對話の世界にふみこんでいる。卷四「月漉漉篇」はまた、詩人の脳裏に浮出した一片の美しい幻想世界である。

蛇神詩と呼ばれてきた李賀の詩の性格は、奇想性とでも云い換えられるべきものであろう。それは、論理の無視と視点の飛躍を伴うがゆえに脉絡をたどるのが困難であり、その故にいわれなき蛇神詩の名を被ってきたのであった。

姚文燮が「昌谷集注」⁹⁾の凡例に於て、

毋惑于世之註昌谷者、拘于牛鬼蛇神一語、直以繪一獐獐幻怪之狀、以爲昌谷也、廬山眞面目終不可見矣（凡例四則）と断じているのは誠に正しい。李賀詩の奇怪さはあくまで表面上の事であり、読み取ってやらねばならぬものは蛇神に託された李賀の種々の情念——懷旧、傷逝、相思等——の複雑にないまざったものであろう。李賀の詩は、古典的な評語で云うなら、襍・麗とでも評すべきものである。

別な面からこれを説明するなら、むしろありふれた典故を素材としつつ、そこに、例えば「濃・湿・香・冷・死・凝・紅」などの李賀の愛用する感覚語をちりばめる事により、彼独自の世界を構築した点に詩人としての李賀の手柄がある。ただそれがあまりにも哀傷にすぎ調和感を欠くと、伝統的な観点に立つ中国の批評家からは見做されるほどの空想力を持ちこんだゆえに、いわれなき悪罵を受けたのであった。

考えてみれば文学にとって空想力は必須であり、戯曲をその文学の初めに残さなかった中国文学の遅い実りが中唐の李賀に結んだのである。

しかもこの事象は果して作家としての李賀一個人のみにとどまるものであるのだろうか。私には次に、彼の所属した時代——ことに中唐の元和期——を眺める必要がある。

二 李 賀 の 時 代

偏倚の時代 李賀の詩人としての活躍は元和七・八・九の三年間に集約される。この時代が怪奇志向の顕著な時代であった事は、これまでもいくつかの指摘がある。はじめにそれらをごく簡単に要約しておこう。

① 仏教を含めた異教の流行

唐代に於て仏教が鎮護仏教的な役割りを果たしていたとは、最近の任繼愈氏「漢唐仏教思想論集」の説く所である（十八頁）。仏教は韓愈が批判した事で代表される如く、中国の正統的な概念とはあくまで相入れぬものであった。

李賀と沈亜之

ところが、仏教はその教理で知識人を誘引したばかりではなく、仏典に含まれた大量の説話、また説講を通して中国文学に付加するものがあつた。

② 異国趣味

白居易の「新樂府」は、この時代の風潮をよく伺わせる。例えば「時世粧」からはこの時代の文化が爛熟のあまり偏頗な趣味にすら走っていた事が知られる。

「南部新書」⁽¹⁰⁾戊集が伝える次の逸話もこの時代を風靡した異国趣味をよく示している。

大中初、女蠻國入貢、奉其國人、危髻金冠、瓔珞被體、故謂之菩薩蠻、當時倡優遂製菩薩蠻曲、文士亦往往聲其詞也。

女蛮の身にまとうた瓔珞と同時に、異国の旋律も当時の人々を魅了したものであつたろう。

③ 神仙・仙薬の流行

「資治通鑑」元和年間の条は、いかがわしい道士・柳泌に性慾りもなく何度もだまされる憲宗の姿を活写している。

皇帝ばかりでなく、当時の士人も服薬に凝っていた。「白氏文集」⁽¹¹⁾五、卷二十九に収める「思旧」と題する詩は、反論をも招きつつ、韓愈、元稹らの服薬を暴露している。同じく卷三十六「戒薬」からも服薬の蔓延ぶりをよみとる事が出来る。

以上①②③に挙げたよく知られた例だけでも、もう充分な様ではあるが、今、私は李賀の時代を支配した風潮を別な資料からもみてゆきたいと思う。

④ 巫風の流行

巫と医術 唐代一代を通じて巫風が蔓延した事実については、すでに中村治兵衛氏「唐代の巫風」(『史淵』一〇五・六合輯号)にくわしい。この巫は、唐代の官職としては太常寺に属していた。奉礼郎をつとめた李賀の部署もまたここであつた事は示唆的である。「新唐書」⁽¹²⁾卷四十八「百官志」三に、

太常寺、掌禮樂郊廟社稷之事……

奉禮郎二人、從九品上……

太醫署、令掌醫療之法、其屬有四、一曰署師、二曰針師、三曰按摩師、四曰呪禁師……

太卜署、掌卜筮之法……(細字注)有卜助教二人、卜師二十人、巫師十五人、卜巫生四十五人。(傍点筆者)
医師と巫師とを同一部署に配置する考え方は、今日の我々からみてそぐわぬものを感じさせるが、両者は、病を身体から去らしめようとする意図に出る行為に於て、共通して医療なのである。「太平広記」⁽¹³⁾卷二八三に載せる「白行簡」と題する話は、巫がまさしく医術であつた時代を端的に物語っている。

白行簡

唐郎中白行簡、太和初、因大醉、夢、二人引出春明門、至一新塚間、天將曉、而回至城門店、有饅餅飢餓者、行簡餒甚、方告二使者、次忽見店婦抱嬰兒、使者便持一小土塊、與行簡令擊小兒、行簡如其言擲之、小兒便驚啼悶絕、店婦曰、孩兒中惡、令人召得一女巫至、焚香彈琵琶、召請曰、無他故、小魍魎爲患耳、都三人、一是生魂、求酒食耳、不爲祟、可速作飢餓取酒、逡巡陳設、巫者拜謁、二人與行簡就坐、食飽而起、小兒復如故、行簡既寤、甚惡之、後逾旬而卒(出靈異記)

李賀と沈亜之

白行簡は白居易の弟で、伝奇小説作家として名を文学史にとどめている。「李娃伝」「三夢記」などの作がある。白居易らと伝奇とのつながりについては後にまたふれる予定である。

巫の道具 この例でも知られる如く、巫の治療には琵琶が用いられた。李賀の「惱公」詩（巻二）にも「琵琶道吉凶」とある。

華嶽廟 二首其二 王建

1 女巫遮客買神盤

爭取琵琶廟裏彈

聞有馬蹄生柏樹⁽¹⁴⁾

4 路人來去向南看（「王建詩集」⁽¹⁵⁾ 卷九）

また同じく王建の「賽神曲」に、

1 男抱琵琶女作舞

2 主人再拜聽神語

の句がある処からみると、男が弾じて女が舞う巫覡一組のものもあつたらしい。李賀の「神絃曲」（巻四）に於ても女巫は舞っている。李賀の注釈者である王琦は（「神絃」巻四）に注して、次の様に述べている。

蓋唐時巫師之狀、大率相同如此詩所云、以相思木爲琵琶、而金畫舞鸞之狀于其上云々、

王琦の見解は「広記」・王建の二例を考え合せて全く正しい。そして王建のこの詩は、かなり写実的な句といえるのだから。

⑤ 厭勝

知識人と迷信 漢代、巫蠱の獄から清代に至るまで、厭勝は官の嚴禁する所であつたにもかかわらず根絶しなかつた。「福惠全書」卷二十六「教養部」に於て、黃六鴻が「禁淫祀・嚴邪教」の項を立て、官吏の心得のひとつとしているのは、逆に淫祀邪教の清代に至るまでの根柢よさを示すものでもある。

韓愈は唐代の知識人としては理知的な思考で物を整序しようとした人であつた。「韓昌黎集」卷十一に収める「原鬼」は、理屈で説明のつかぬ鬼の存在は認めた上で、然し乍ら、鬼は人の氣に應じてはじめて發動するものだといつて、鬼の由因を人に歸している。人に理解可能なものは人だからである。この様な論の立て方に韓愈の合理的な説明への努力がみとれるであらう。

この韓愈にしてすら卷三十一「柳州羅池廟碑」に於ては、友人・柳宗元が存命中に三年後に彼が死してのち神となつて降ると予告した言葉がそのままに実現したと記述している。韓文の注釈者・蔣之翹もこの非合理さの説明に苦勞したものとみえる。「羅池廟碑」篇首に於て、まず、茅坤の評語を引用した上で次の様に述べている。⁽¹⁶⁾

茅坤曰、予覽昌黎碑柳州、不書柳州德政之可載、載其死而神爲一節、似狎而少莊

この茅坤の批評に反論して、蔣之翹はいふ。

世以公此文爲語怪、非也、士有抱負不克施、遭流落、以死爲明神列鬼、巍峩廟食、理也……退之豈矯誣柳州以求異乎

更に卷十一「原鬼」の注では、

昔李石嘗謂、至作羅池碑、欲以鬼威獨人、是爲子厚求食也

李賀と沈亞之

という李石の評語に対して、蔣之翘は理由をのべずに

至若羅池之碑、此弔子厚之文、非紀羅池神之文也

と苦しい弁解をしている。

唐代の呪術 これは韓愈を開明的合理主義一本で解しようとするから無理が生ずるのであって、当時の人々に於ては基底をなす考え方はさほど割り切れたものでなく、韓愈もそれを免かれていなかった、と見る方がよいであろう。

ともあれ、唐代では、民間でも宮中でも、迷信に頼って物を説明したりする事は一般的であった。次の二つの資料はこの事をよく示している。

高駢 太平廣記二八三⁽¹³⁾

唐高駢、嘗誨諸子曰、汝曹善自爲謀、吾必不學俗物、死入四板片中、以累於汝矣、及遭畢師鐔之難、與諸甥姪同坎而瘞焉、唯駢以舊氍毹之、果符所言、後呂用之伏誅、有軍人發其中堂、得一石函、內有桐人一枚、長三尺許、身披袿、口貫長釘、背上疏駢鄉貫甲子官品姓名、爲厭勝之事、以是駢每爲用之所制、如有助焉（出妖亂志）

高駢は黄巢の乱を平げた武人で光啓年間に殺されたところから、李賀より少し遅れる人である。次に引くのは「旧唐書」⁽¹⁷⁾卷五十一「后妃列伝」第一である。

初、武皇后、貞觀末、隨太宗嬪御、居於感業寺、（王）后及左右數爲之言、高宗由是復召入宮、立爲昭儀、俄而漸承恩寵、遂與（王）后及良娣蕭氏遞相譖毀、帝終不納后言、而昭儀寵日厚、后懼不自安、密與母柳氏求巫祝厭勝、事發、帝大怒、斷柳氏不許入宮中云云、

③ 怨 靈

人のたたり 「旧唐書・后妃伝」⁽¹⁷⁾はこれにつづけて、勝ち誇った則天武后の復讐とその後日談を記す。

庶人良娣初囚、大罵曰、願阿武爲老鼠、吾作猫兒、生生扼其喉、武后怒、自是宮中不畜猫、初囚、高宗念之、間行至其所、見其室封閉極密、惟開一竅、通食器出入、高宗惻然、……（中略）……高宗曰、朕即有處置、武后知之、令人杖庶人及蕭氏各一百、截去手足、投於酒甕中、曰、令此二嫗骨醉、數日而卒、後則天頻見王蕭二庶人、披髮瀝血、如死時狀、武后惡之、禱以巫祝、又移居蓬萊宮、復見、故多在東都何とも凄惨な記事ではある。猫になってとりついてやる、という発想が注意を惹く。

極めて興味深い逸話を、穆宗長慶元年、西曆紀元八二一年の出来事として「資治通鑑」⁽¹⁸⁾は載せている。李賀を取りまいていた此の時代の雰囲気が伝わるような話である。

盧龍節度使劉總、既殺其父兄、心常自疑數見父兄爲祟、常於府舍、飯僧數百、使晝夜爲佛事、每視事退、則處其中、或處他室、則驚悸不能寐、晚年恐懼尤甚

のち劉總は自宅を仏寺となし、剃髪して僧となり、夜いづくかへ逃がれ去ったという。

己一人で軍務を総べたい為、父を毒殺し兄を杖殺（唐紀五十四に見える。憲宗元和五年秋七月の事）した結果の恐ろしさにおびえて出家する將軍のこの逸話は、一見志怪風ともみえて実はことなる。怨みを抱きつつ憤死した勇猛な人物が死霊となって荒ぶるがひとたび鎮められるや、その土地の守護神となるパターンはあるだろう。しかし何の能力もない——この場合、父・兄ともに武將ではあったがさして武功を樹てたとも思われない——個人のうらみつらみが、また先の例でいえば怨みを含んで殺された宮女の呪いが、死後に祟りとなつてつきまとうという、何か血のりにまみれたおどろしいものを感じさせるこの逸話は、因と果との分明ならざる六朝志怪とは全く誤罔氣のことな

李賀と沈亜之

る異質の世界を感じさせる。唐に入り、時代の中に新しく芽ばえたものと感じさせるのである。怨霊のこういった類の話は他にも報告があり、中唐になって大幅にふえてきたものと推察される。

時代の雰囲気を追う為に、「通鑑」の如き——書題が如実に示すように、これはあくまで教科書である——、また史書の如き表向きの資料を用いる事には躊躇を感じるが、他に替りうる資料未発見のまま姑く用いる事にする。野史・稗史小説の類を丹念に漁る事により他日補われる点が多いだろう。今いえる事は、逆に公式資料にまでこの類の話が侵入する程めざましい事象となっていたという事である。

我々が今日考えるのよりはずっとおどろおどろしい幽暗が人間精神を支配していた時代、それが李賀の生きた時代であった。薄明の時代。その意味で唐代は明瞭に中世に属している。李賀の時代はまさしく「あやかし」の時代であった。先に挙げた種々の流行や、これまで検討してきた錯倒した精神のあらわれようは、文化の爛熟期に必須の現象ともいえるものであり、詩人がそれら時代の諸事象をどう受けとめていたかのトータルな回答が蛇神詩を一頂点とした「李賀詩集」四巻となって我々の前に提出されているのである。

蛇神詩と元和　そうして、この時代風潮全般の中での李賀の所謂蛇神詩の一群は、決してその特異性のみが云々される孤立した存在ではなく、中唐詩の中に於て一定の地位を占める事が了解されるであらう。時代風潮の具現のひとつ、それが李賀の蛇神詩なのであった。巻四「神絃曲」の、

2 旋風吹馬馬踏雲

3 畫絃素管聲淺繁

の句も、先に挙げた王建の「華嶽廟」詩、

3 聞有馬蹄生柏樹

4 路人來去向南看

と対比してみる時、初めてその正しい容貌をあらわすであろう。劉辰翁⁽²⁰⁾が「神絃曲」を、

讀此章、使人神意森索、如在古祠幽黯之中、親覩巫覡賽神之狀也

と評しているのは蛇神詩の写実的な一面を的確に指摘したものである。

三 李賀と呉興の沈氏

李賀の現存詩集から沈氏一族に関連ある詩として次の二首を見出す事が出来る。

① 卷一、「同沈駙馬賦得御溝水」

② 卷一、「送沈亜之歌并序」

更に諸テクストの巻頭に付せられている杜牧「李長吉歌詩敘」(又、「樊川文集」卷九)に、

③ 集賢学士沈公子明

の名が見える。以下この三名を中心に李賀と沈氏一族との関わりを調べ、そのもつ意味について考察を加えたい。

李賀と沈亜との交遊はよく知られている。今、李賀と沈氏思族との関わりを調べる際にも沈亜之から取りかかるのが便であろう。

李賀と沈亜之

① 沈亜之（字下賢、徳宗建中二年 A.D 七八一—文宗太和六年 A.D 八三二）⁽²¹⁾

うぬぼれの強い李賀が「呉興才人」（巻一「送沈亜之歌」）と呼び、亜之も亦、李賀を、「余故友李賀」（「沈下賢集」⁽²²⁾ 巻九「敍詩送李膠秀才」）と称したこの二人の間には、かなり親密な交際があったものと推察される。李賀には送別の歌一首があり、沈亜之の側には上記の李賀をなつかしむ文一篇が残されている。

沈亜之の文学 亜之の作品は散文がそのほとんどを占める。明刻翻宋本（四部叢刊本）と、葉德輝の観古堂彙刻書本の二種の刊本を以て今に伝わっている。ともに十二巻。史伝の文章にひいでると同時代から認められた彼の名を、今日の文学史は、伝奇小説作家として位置づけている様である。

魯迅「唐宋伝奇集」は三篇（「湘中怨解」「異夢録」「秦夢記」）を、汪辟疆「唐人小説」は更に「馮燕伝」を加えて四篇を採録している。二者の採録にすでに差がみられる様に、実は亜之の散文作品中、小説的結構をもったものはこれだけにとどまらない。巻二「雜記」、巻四「夏平」「誼鳥録」「李紳伝」、巻五「歌者葉記」、巻六「移仏記」などは、程度の差こそあれそれぞれ伝奇的創作態度——奇を伝えようとする志向に執筆の主要興味が置かれている——を持っているものと認められる。

彼は晩年、病にふした時、巫をよんで祈禱してもらう文章を書いた。今、「沈下賢集」巻二に「祝橘木神文并序」として残っている。この作品もかなりの字数を費して、抜うべき癩鬼の描写を行った伝奇的な一篇である。巫を医療に用いる事は既に見たように唐代のならわしであったにせよ、これまた既に見たように士人としては表向きにはなすべき事ではない。死の間際とはいえ、巫に依頼した文を著した事は、いや死の間際だからこそ、彼の考え方の基層が如実に露呈したものであらう。

沈亜之の伝奇的散文には共通する特徴が認められる。それは、史伝体の散文が持つ簡約さのうちに、おのずと滲みでる抒情性である。内山知也氏は「沈亜之と小説」（『中国文学報』十二冊）に於て、この傾向を、「散文だけで堅く固まろうとする叙事の流れを、暫く抒情の世界に発展させようとする意欲」と説明しておられる。この説明は妥当と思われる。沈亜之の筆がややもすればのめりこみがちな抒情の世界とは、時や、死や別れなど過ぎ逝くもの一切への感傷を甘く包みこんでたゆたう情感の世界の謂である。これは「人生皆夢、夢又現実」（巻一「遊仙賦」）という沈亜之の人生観を背景としたものであり、更にこれはまた、

9 生世莫徒勞

10 風吹盤上燭（卷三「銅駝悲」）

という李賀のつゞやきとも共通するものである。

伝奇小説にはその末尾に作者の教訓めいた語が付される事が多い。或いは、教訓を加える事で士人であり乍ら奇を伝えた事の責任回避になっているのかも知れぬが、それはともかく、この事象は亜之に於ても散文だけでまとめられた「馮燕伝」等には確かにみとめられる。一方「湘中怨解」や「秦夢記」などの歌詞と一体となった作品の場合、教訓性が姿をひそめる現象がある。

「湘中怨解」⁽²²⁾の結語に何故この物語りを書いたかを説明して沈亜之は云う。

従生章教、善撰樂府、故索而廣之、以應其詠

沈亜之の伝奇小説も亦、実は楽詞と表裏をなす作品なのであった。丁度、白居易の「長恨歌」と陳鴻の「長恨歌伝」の関係のように。汪辟疆氏は楽詞と表裏むすびついた例として、この作品には南卓の「煙中怨」を挙げている。しか

李賀と沈亜之

も沈亜之は上文に続けて“因悉補其詞”と記している。この言葉から次の様に結論してよいであろう。沈亜之の伝奇作品はむしろ歌物語りであって歌詞に重点を置いて奇を伝えようとしたものであり、従ってこの系列の作品にあっては教訓性は意識して切り捨てられていると見るべきである。

李賀の文学と沈亜之の文学 李賀の詩と沈亜之の文とは奇を伝える事に主眼をおき、減びゆくものへの追憶、やるせない倦怠感に身をたゆたわせ、無明長夜のうちに己の伝すら失なわれてしまう——沈亜之の伝は兩唐書に逸している——窮措大たる己らの悲哀を綯い合せつつ、楚辭的幻想世界にさまよいこんでゆくという共通のモチーフを、前者は伝奇的傾斜を有する詩で表わし、後者は史伝的傾斜をもつ小説で著わしたのだと解される。選んだ表現形態こそ異なっていたが、同一のものを実はめざしてこの二人はいたのであった。李賀と伝奇との接点に沈亜之はたっていた、といえるであろう。

沈亜之の自述によれば彼は韓愈の門下に十年余り遊学したという（巻九「送韓北渚赴江西序」）。韓愈その人の文章がすでにもつ伝奇的傾斜、また、韓愈を主体とする古文運動が伝奇に及ぼした影響についてはこれまでに指摘があった。“駁雜無実之説”を愛好するのは韓愈の一門に共通な現象であった。めずらかな世界や題材への興味は李賀の場合、ひとつには「楚辭」という恰好の対象をえて万華鏡的夢幻を展開し、ひとつには彼に顕著な移ろいの感覚に逃避⁽²³⁾が加わり神仙界の描写となつてあらわれた。より世間的に逞ましかった他の作家にあっては、同じ志向は現実世界へ向つて噴出する。曰く「某々記」、曰く「某々伝」と記伝のスタイルをとりつつ現実での珍聞奇談を核として己の文学を構築した。片や世間を離れた処に、片や市井のうちに、求めた場所こそ違いいずれも奇を追う事に同一の意識構造を認めうるのである。

皇甫湜は李賀の詩才の最初の発見者（「長吉集」巻四「高軒過」）であり、一番の親友であった。李賀が友人に与えた詩の中で最も多い四首を占める。

皇甫湜の文学観を、今日、我々は「皇甫持正文集」⁽²⁴⁾に収める、李生に答えた二通の手紙（巻四）によって伺う事が出来る。当代の文は奇怪を先にしてしていると難ずる李生の批判に応えて、第一の書で皇甫湜はこう云う。

夫意新則異於常、異於常則怪矣、詞高則出衆、出衆則奇矣、虎豹之文、不得不炳於犬羊、鸞鳳之音、不得不鏘於鳥鵲、金玉之光、不得不炫於瓦石、非有意先之也、迺自然也

第二の書では主張は更に一步を進め、奇は確かに正ではないけれど正をそこなうものではないのだと、柳宗元が韓愈の「毛穎伝」を弁護した（「河東集」巻二十一「読韓愈所著毛穎伝後題」）のと同様な論理で、苦しい言分けをしている。

怪奇なものこそ文学なのだという、奇妙に倒錯した論理をふりかざしつつ、不毛の文学へとほろびの途をひた走った韓門第二世代への総括こそ、まさしく杜牧が李賀に与えた、

求取情狀、離絶遠去筆墨畦逕間、亦殊不能知之（「樊川文集」⁽²⁵⁾巻十「李賀集序」）

という評語に帰すものである。

沈亜之と白門 前段に於て我々は沈亜之の創作態度が韓門の文学理論にそうものであり、且つ李賀の文学とも重なる面のある事を見てきた。ここではもうひとつ別な面を検証してゆきたい。それは、韓愈一門の文学と並んで元和期を風靡した元白の文学と沈亜之の文学との関わりである。

「下賢集」⁽²⁶⁾巻一「春詞酬元微之」は、単に沈亜之と元稹との交游を示すにとどまらず、その文学の相似性も示す

李賀と沈亜之

ものである。

春詞酬元微之

1 黃鶯曉時春日高

紅芳發盡井邊桃

美人手煖裁衣易

4 片片輕花落翦刀

沈亜之の詩は「下賢集」の卷一に十八首を録するのが全てであるが、そのいずれも、また上述した伝奇作品中の諸歌詞も含めて、元輕白俗とされた平易さと流麗さとを有している。更に一首挙げて例証としよう。

春色滿皇城

1 何處春輝好、偏宜在雍州

花明夾城道、柳暗曲江頭

5 風軟遊絲重、光融瑞氣浮

鬬雞憐短草、乳燕傍高樓

9 綉轂盈香陌、新泉溢御溝

迴看日欲暮、還騎似川流（卷一）

内山氏もまた前掲論文中で沈亜之の詩風を元稹・白居易等の唱導する詩風の流れを汲むものと想定しておられる。日常的な交流があつて詩風にも影響があつたのであろう。

② 沈述師（字、子明。貞元末進士）

杜牧「李賀詩集敘」に見える、「沈公子明」なる人物が沈述師であらうとの説は早くから出ていたが、推測にとどまっていた。まずこれから取りかかろう。これまでの説を挙げると、

① 繆鉞氏は、「沈子明大概就是沈著作述師。」と述べている（一九五七年、人民文学出版社、「杜牧詩選」二十七頁）。

② 斎藤响氏は、「子明は沈述師のこととされている。」と述べている（一九六三年、集英社「李賀」序）。

③ 荒井健氏は、「沈述師は沈伝師の身内で弟あるいは従弟かと思われる人物である。」と述べている（一九七〇年、筑摩書房「杜牧」二十一頁）。

結論を先に述べるなら、これまでの推測は正しい。杜牧の沈子明は名を述師といい、沈伝師の弟に当る人で、沈亜之と同じ呉興の沈氏出身である。以下にこれを考証してゆこう。

杜牧の序には「集賢・学士・沈公子明」とあり沈子明の職位を集賢学士と称した事が知られる。一方、同じく杜牧は「張好好詩」（「樊川文集」卷一）の、³⁹「飄然集仙客」の句に自注して、「著作嘗任集賢・校理」と述べている。ここに云う著作とは、「張好好詩」序に、「後二歳、為沈著作述師以雙鬟納之」とあるので沈述師である事は間違いない。それでは集賢学士と集仙客および集賢校理とはどう整合されるべきであろうか。

「新唐書」¹²卷三十七「百官志」二の、集賢殿書院の条に

學士、直學士、侍讀學士、脩撰官、掌刊緝經籍

とある。また細字注にて、

（開元）八年又加校理、刊正、校勘官云々、

と見える。集賢校理なる職名は開元八年以降に存在した。更に「唐会要」⁽²⁶⁾卷六十四、集賢院の条に次の記載が見える。

（開元）十三年四月五日、因奏封禪儀注、勅中書門下及禮官學士等、賜宴于集仙殿、上曰、今與卿等賢才、同宴于此、宜改集仙殿麗正書院爲集賢院：（中略）：院內五品已上爲學士、六品已下爲直學士

集仙院は集賢院の改称以前の名称なのであった。以上の三つの資料からこういう事になろう。

まず、集賢と集仙について。「張好好詩」は太和三年（八二九年）からの出来事を詠った太和九年（八三五年）の作品（繆鉞氏の考証）であり、詩句には当然、集賢の語を用いるべきであった。この時、たまたま又は意図して旧称の、「集仙」と詠ってしまったので、当時、太和六年に沈述師が実際に任命された官名である集賢を自注する必要があるしたのである。

次に学士と校理とであるが、沈述師が張好好を落籍した太和六年に、沈述師が実際に任命されていたのは学士だった筈である。その一年前、太和五年に杜牧が書いた「李賀詩集叙」では「集賢學士」と明記している。學士は「唐会要」でみた如く五品以上の呼称である。集賢校理は両「唐書・百官志」に品階の記載ない為、はっきりとは分らぬものの、相当職である集賢校書・正字は「新唐書」によれば九品の官位である。それ故、沈述師が集賢校理だったのは太和五年以前に遡らねばならず、そこで杜牧も自注する際には旧称の集仙にあわせた形で旧い官職を記し、かつ「聘任」とことわったのである。太和五年までには昇任して五品以上の集賢學士となっており、六年もそのまま、そうして「張好好詩」の實際に書かれた太和九年には著作郎（従五品上）にまでなっていた。そこで「張好好詩」序では「沈著作」と称する事を得たのである。

かくして集賢校理改め集賢学士の沈子明と集仙客また著作郎の沈述師とは同一人たる事が判明した。ここにひとつ臆測をつけ加えておくならば、先に引いた「唐書・百官志」によると集賢（仙）院には、置廃はあったが正字二人（従九品上）が置かれていた。今「李賀詩集」卷三に「秋涼詩寄正字十二兄」の詩がみえる。詩意から推して李賀の弟兄とおぼしい。この人物が沈述師と李賀とを仲介した可能性は充分ある。

さて、「元和姓纂」⁽²⁷⁾卷七によれば、

（沈）既濟進士、唐翰林學士、生傳師弘師述師

とある。この記述の順序から、沈述師は沈伝師の弟であったと一応しておこう（後に再述）。沈伝師は杜牧の上官であった。その縁で杜牧と述師とが知り合い、「李賀詩集」の序を沈述師が杜牧に依頼したのであらう。

「旧唐書」卷一四九、「新唐書」卷一三二には沈伝師の伝がたてられている。そこには、沈伝師の字は子言と記す。これからして、同一人である事が判明した沈子明と沈述師は、述師が名で子明が字と決めうるであらう。兄弟の字には字・旁ほかの共通要素を含むのが普通だからである。

次に沈述師が登第した年であるが、これについてはよくは分らない。「登科記考」⁽²⁸⁾卷二十七には、

元和姓纂、沈既濟生傳師、進士、次子述師、按、傳師於貞元及第、述師當亦同時

とする。更に卷十五では、

永樂大典引蘇州府志、傳師於貞元二十一年登第

としている。一方「吳興志」⁽²⁹⁾卷十六では、

貞元十九年進士、貞元二十年登制科

とする。沈伝師が制科に登ったのは、やはり年次に食違いがあるものの、「記考」卷十六にいう、「元和元年、才識兼茂明於体用」を指すのであろう。資料に食違いがあつて沈伝師の登第の年を正確に決められないため、従つて述師も貞元末の進士ということで、一応満足する他ないのだろう。杜牧が沈伝師の為に書いた「吏部侍郎沈公行状」（『樊川文集』卷十四）にも沈伝師を貞元末進士としてあり、明言していない。

沈伝師と述師の排行順次について若干の問題がある。岑仲勉「唐人行第録」では、「沈四述師、伝師之弟、見元和姓纂」と簡単に紹介したあと「白氏文集」五「晚春欲携酒、尋沈四著作」、に見える沈四著作は、杜牧「張好好詩」序に見える沈著作述師と同一人であると考証している。

時代相當、是白詩沈四著作述師之證

と述べたあと、

但、與傳師之行序不合、豈十四之奪文歟、と疑っている（六十三頁）。

沈伝師の排行が八であつた事は、岑氏が同書六十四頁で白居易や沈亞之等の詩を引いて確証する如く動かせない処であらう。とすると、沈伝師が弟で述師が兄とも考えられる。同じ白居易が沈の兄弟に贈つた詩で排行を誤るというのも解せぬ話ではあるが、ここはやはり、次の二つの理由などを考え併せて、沈伝師―述師の順と考えるべきであらう。

① 同時代資料である「元和姓纂」の記述順序を尊重する。

② 杜牧が沈伝師の幕下にいた時、述師の官位は伝師よりも卑かつた（三十頁参照）。

岑氏の如く沈述師の排行から「十」字が脱したと考えるのは妥当であると思われる。徐松も「登科記考」に於て、

“次子述師”と態々二字を加えている。

そして、ここに、岑氏の考証の裏付けとなりうる資料が実は「李賀詩集」に存する。卷三「潞州張大宅病酒、遇江使、寄上十四兄」と題する詩がそれである。これは李賀が元和九年（八一四年）から元和十一年（八一六年）にかけて、河東節度使の幕下にあつた張徹をたよつて潞州にいた時の作である。起句の

1 秋至昭關後

2 當知趙國寒
に王琦が注して、⁽⁹⁾

昭關、十四兄所住之地、江南通志、昭關在和州含縣小峴西、伍子胥自楚奔吳、過昭關、卽此
といい、また

19 覺騎燕地馬

20 夢載楚溪船

の句に、

和州乃戰國時楚地、十四兄在其處

と注する。沈亜之を李賀は吳興才人と呼んでおり、彼の一族をこれまで吳興の沈氏と呼んできたが、范成大「吳郡志」や談鑰「吳興志」などを査するに、江南一帯にかなり広範圍にわたつて分住していた一族と知れる。沈述師はこの時、昭関の地にいたのであらう。吳興（浙江）と昭関（安徽・和州含山県）の地とは直線距離にして一五〇キロぐらいなものである。或る注釈ではこの十四兄を李賀の親族とするが、李賀の故居は河南であり、親族も当然、河南附

李賀と沈亜之

近に散在していたであろうから、吳興の沈氏に比するより蓋然性がうすい様に思われる。但し、親しい友人とはいえ、異姓の者に対して唐代に於ても後世の如く親族關係を擬称しえたかどうか筆者には不安がある。指教をまちたい。

李賀のこの作は彼の最晩年に属するものであり、通常、元和十年に系けられている。沈述師は李賀の遅い知友であつたのだらう。沈述師が杜牧に「李賀詩集」の序を依頼した時の言葉（「樊川文集」⁽²⁵⁾卷十「李賀詩集叙」）、

我亡友李賀、元和中義愛甚厚、日夕相與起居飲食云云

は、正しくこの事を裏書きしている。それだから「新唐書」にも李賀と交游のあつた者として挙げる数名のうちからも脱しているのだらう。だが、身内である李賀の姉は、この事をよく知っていた。李商隱の撰した「李賀小伝」（「李義山文集」⁽³⁰⁾卷四）には、王氏に嫁いだ李賀の姉が李商隱に口ずから語つた言葉としてこのように書きとめている。

長吉往往獨騎住還京、所至或時有著、隨棄之、故沈子明家、所餘四卷而已

李賀の家族も彼が沈氏一族とつき合っていたのはよく知っていたものと見える。

白居易と沈述師 白居易がこの沈述師との交游を詠った詩は二首残されている。「醉題沈子明壁」（「白氏文集」四

・卷二十一）と、「晚春欲携酒尋沈四著作先以六韻寄之」（「同」五・卷三十三）とである。先の詩は太和一二年（八〇七、八年）、洛陽での作と推定されている。⁽³¹⁾詩には、

1 不愛君池東十叢菊

不愛君池南萬竿竹

愛君簾下唱歌人

4 色似芙蓉聲似玉

我有陽關君未知

若聞亦應愁慙君

とみえ、白居易と沈述師のへだてのないものの云いぶりが伺われると共に、太和六年に張好好を落籍する以前の沈述師の生活ぶりが知られて興味深い。

後の詩は既に岑仲勉氏が紹介していたものであるが、この詩には自注⁽¹⁾が付されており、

沈前後惠詩十餘首、春來多醉、竟未酬答云云、

とある。現存する詩集から知られる以上の頻繁な交游を兩人の間に想定してよいであろう。

沈述師の文学 述師の文学については詩文が全く残っていない為、知る事が出来ず残念である。ただ、「張好好詩」に「諷賦欺相如」の句がみえ、賦に秀でたと知られる。賦は司馬相如以来、壮大な虚構を本領のひとつとしてきた文学形式である。沈述師の文学もまたこの時代の風潮上にある虚構を得意としたのであろうか。また、先に引いた白居易との酬答から、白居易らにも充分その詩才が認められていたものと想定できる。

③ 沈駙馬

「李賀詩集」巻一に「同沈駙馬賦得御溝水」の作がある。この沈駙馬については不明のままとしてきた。具体的な手掛りは詩そのものからも得られない。ただ、末句に、

7 幸因流浪處

李賀と沈亜之

8 暫得見何郎

とある処から、李賀が上京した際（元和七・八年頃のことか）庇護を求めてこの沈駙馬に面会した事がわかる。この沈駙馬とは誰であろうか。呉興の沈氏から駙馬となった人はこの頃で二人いる。

① 一人は代宗の女・長林公主が降嫁した沈羽（又は沈明）である。

「唐會要」⁽²⁶⁾ 卷六に、「代宗十八女……長林、降沈明」とあるのがそれで、「新唐書」⁽¹²⁾ 卷八十三、「諸帝公主列伝」第八、代宗十八女の条に更にくわしい記事がみえる。

代宗十八女……長林公主、下嫁衛尉少卿沈明、貞元二年具冊禮、德宗不御正殿、不設樂、遂爲故事、薨元和時更に「下賢集」⁽²²⁾ 卷十一に収める「沈參軍故室李氏墓誌銘」にも記事がみえる。

及德宗即位……羽爲駙馬都尉、尚長林主

「新唐書」では沈明、「下賢集」では沈羽となっている相違はあるものの、長林公主が降嫁したのは一人に決まっているから、これはどちらかの誤記なのであろう。少くとも次に述べる沈翬との誤記には、時代的な差がある事や字形の点からいって、しにくいであらう。

この長林公主は貞元二年（七八六年）に結婚して、元和年間に亡くなっているとすれば、元和は十四年まで続くから、李賀が面会した元和七年（又は八年）は多く見積って、その亡くなる七年前の事となる。

② もう一人の沈駙馬は、順宗の女・西河公主に尚した沈翬である。「唐會要」卷六に、「順宗十一女……西河降沈翬」とあるのがそれで、「新唐書」⁽¹²⁾ 公主列伝」のその条にも、

西河主始封武陵郡主、下嫁沈翬、薨咸通時

とみえる。更に「下賢集」⁽²⁾ 卷十一「唐故銀青光祿大夫檢校散騎常侍兼宮苑閑廐使附馬都尉郭公墓誌」には次の様な記載がある。

初西河主、前降吳興沈氏、生子男一人、及郭氏之喪、無後、而以沈氏之嗣爲之主

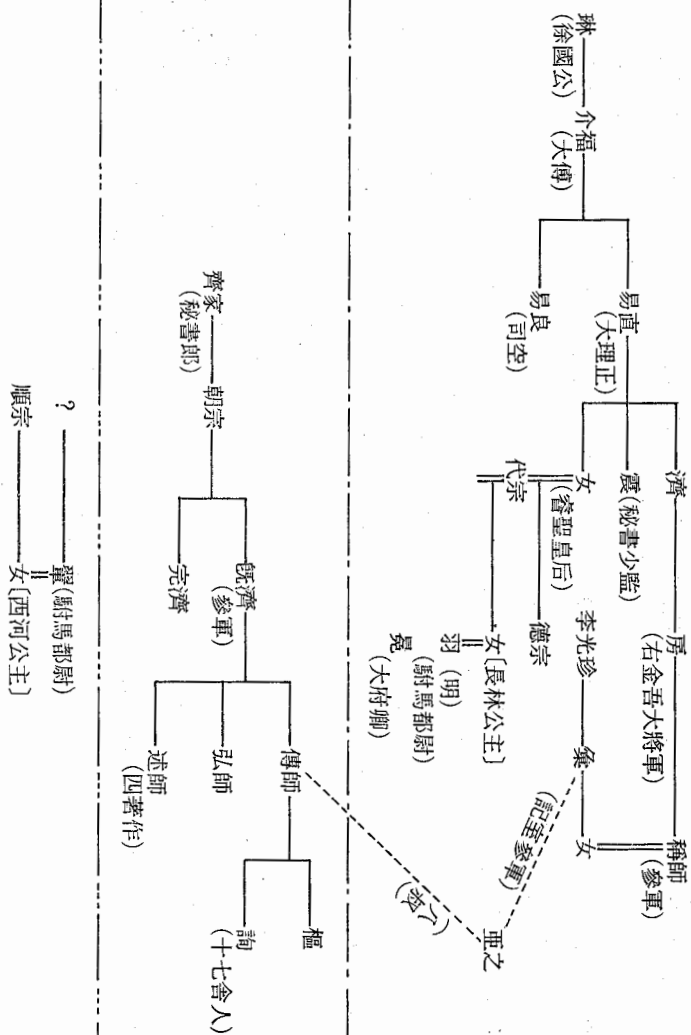
郭氏は長慶二年（八二二年）に急死しており、西河公主はそれ以前に沈翬と結婚して一児をもうけ、沈翬と恐らくは死別しており、且つ、郭氏の喪儀の際にその遺児が喪主に立ちうる程の年限という事を考え併せると、元和年間に沈翬と結婚していた可能性は高い。

二人の駙馬 二人のうちどちらが李賀の詩にいう沈駙馬なのであろうか。決定的な資料に乏しいものの、私は沈羽ではないかという推測に傾いている。

沈氏の世系は諸書により錯綜していて明らめ難い点があるのだが、今、主として「吳興志」を基に他の資料と整合させつつ世系を作成すると次頁の様になる。

この図で見ると、沈羽は沈亜之の家系の一員である。沈伝師と沈亜之とは叔姪の關係（八叔）にあるから、沈亜之自身の出自は資料を欠くものの、彼が沈伝師及び沈羽を含む系類のどこかに収まる事は間違いない。一方、沈翬はどの家系に属するのか全く明らかでない。沈翬の名を沈亜之は恐らく知らなかった為に「郭公墓志」に於て「西河主降吳興沈氏」という漠然とした表現しか出来なかった。同じ吳興を冠称する沈氏ではあったものの、よほど遠い親族であつた為、伝聞により記したものであろう。

沈翬と結婚した西河公主は順宗の四女で、咸通年間（八六〇～八七四）に亡くなっている。李賀の沈駙馬を沈翬とすれば少しく時代がくり下げられる事になり、李賀と沈駙馬との面会を元和七年前後におく系年からして難しいと思



われる。沈羽は図にある通り、沈亜之の二世代上で李賀より一世代上である。公主の死の七年前、公主の死に先立つ七年前の元和七年頃に面会すると仮定すればやや都合がよくなる。

李賀の沈駙馬が沈羽か沈翬か速断するのは危険でもあるし不可能であるかも知れない。重要な事は少くとも沈氏一族の側の資料からここまで追求する事ができ、若年の李賀が初めて上京の折、頼っていった相手先が沈氏の一人である点に、李賀と沈氏一族のかかわりに、これまでに考えられていた以上の深いつながりを認めうるといふ事である。

呉興の沈氏 この呉興の沈氏一族は伝奇で名を文学史にとどめている家系である。その先祖には梁の沈約を見出すが、呉興に移住してから、しかも唐も半ばすぎになってからは、急速に衰える方向にあったものとみえる。「呉興志」⁽³²⁾卷十六の末尾に於て撰者の談鑰は、呉興の名家として姚氏・沈氏・丘氏などを挙げたのち、次の様に述べている。

唐初爲縣四、後漢置德清、三百年間人物、見於史冊者、反不逮昔、蓋唐都長安、東南人物之仕顯者、率遷邇焉、歲久而爲土著、如姚思廉・元宗、呉太常卿之後也、譜系甚明、唐志傳、思廉云、京兆萬年人、元宗云、陝州人、此類衆矣、宜其人物之寥落也

沈氏の世系については両「唐書」「呉興志」「呉郡志」「元和姓纂」それに沈亜之の自述などを参看すると、相互に食い違いが目立つ。また先に引いた如く、沈亜之その人すら同族で駙馬になったものの名を知らなかった。こちらの駙馬の場合は西河公主に尚しているのだから沈亜之と同年代の筈である。恐らく遠い親族に駙馬となった者がいるといった程度の伝え聞きで名も知らず、実際の交渉はなかったものであろう。沈亜之自身、自分の出自をはっきり語らぬ処からみて、沈氏の中でも傍流であったと思われる。

李賀と沈亜之

代宗の妃を出した沈琳の家系も、その先祖は結局判明しなかったので、貞元七年に五廟をたてて沈琳を始祖としている状態であった。「元和姓纂」ほかを見ても煩瑣な記述は沈佺期までであとは切れている。恐らく一族のエネルギーもここで尽き、あとは族譜を継承してこれなかったものであろう。しかしまた「南部新書」には呉興の沈氏一族の記事が散見する。ここからみれば、唐末・五代を通じて、なお望族としての地位は保っていたとみえる。

この沈氏一族と李賀とは交友が深く、それは李賀の家族も承知していた事は前述した。沈述師・沈亜之の二人が白居易・元稹らと文学面に於てもつながりのあった事もすでにみた。そのほかにも、次の様な事実が指摘できる。

① 沈述師の兄の沈伝師は白居易と同年の元和二年の制科合格者であり、白居易は勿論、李紳・劉禹錫らとの交遊を跡づける事が出来る。

② 或いは可能性にとどまるが、白居易が「送沈倉曹赴江西」詩（宋本闕。那波本卷五十九）で云う沈倉曹とは、元和十四年（八一九）に参軍に任ぜられた沈称師であるかも知れない。沈称師はまるで資料の出でこぬ人物であるが、「元和姓纂」により沈伝師の同族弟とわかる。

白居易のこの作は太和三年（八二九年）に系けられる。太和三年には沈伝師はまさしく江西觀察使となっている。この作品は兄を頼って江西に沈称師が赴いたのを白居易が送別した詩という事になる。とすれば白居易は沈伝師・称師・述師の三人ともに付き合っていた事になるのである。

沈氏一族の文学 沈亜之に伝奇の作が大量にあり、且つその作風は白門にもまたがるものである事は前述した。沈亜之より二世代上にあたる沈既濟もこれまた伝奇作家として名高い。「枕中記」「任氏伝」の二作が知られる。また、その遠祖にあたる沈約にも小説・世説に類する作品のある事は、既に譚正璧氏が「中国小説発達史」で指摘して

いる（一三四頁）。

「南部新書」⁽¹⁰⁾ 庚集の伝える、沈氏滅亡に関する逸話は甚だあやしげなものである。

沈詢嬖妾有過、私以配内豎歸秦、詢不能禁、既而妾猶侍内、歸秦恥之、乃挾刃伺隙、殺詢及其夫人於昭義使衙、是夕、詢嘗宴府中賓友、乃更歌着詞令曰、莫打南來鴈、從他向北飛、打時雙打取、莫遺兩分離、及歸、而夫婦併命、時咸通四年

小者の私怨がもとで命を喪う事自体はありふれた事かも知れない。そこに、かくの如きざれ歌が識に仕立てられて結びつけられる所には、この一族にはこんな話が似合うという共通の認識が裏に働いていなくてはならない。沈氏一族は伝奇の一族であるといってもよいであろう。

沈約を遠祖にいただく呉興の沈氏は、文学的素養にあふれ伝奇作家を産み出した。またその一族は交游の面でも、文学の質の面でも白門と通うものがあつた。この一族と李賀とが深くつながっている事は、李賀の文学を考える上で見落しがたい点である。伝奇の名門である沈氏一族を、白門と李賀との中継点にすえて物を眺めた場合、様相はどの様に変化してくるであろうか。章を改めて考えてみたい。

四 結 語

これまでの理解 李賀の活躍した中唐の元和期は、これまで文学史的には韓愈と白居易の文学集団の対立として図

式化されてきた様に思われる。花房英樹氏は「白居易研究」に於て、中唐期の文学の特色のひとつとして、共通の文学理論に支えられた文学集団が、「他の集団を意識しつつ」誕生した、と述べられる。大曆十才子、皎然を中心とする浙西唱詠集団などのあとをついでこの元和期を特徴づけた集団として花房氏は、韓愈聯唱集団と白居易唱和集団とを挙げられる（一八六頁前後。傍点引用者）。

また鈴木修次氏は、堤留吉氏「白楽天研究」が韓・白の友情を示す例として挙げられた同じ詩を引用し、「単なる儀礼的贈答詩」であり、「白楽天のグループと韓愈のグループはかなり截然と区別されており、詩壇に於て対立する関係にあったと考えられる」と述べられる（唐代の詩人達」二五四頁以下。傍点引用者）。残念な事に花房氏も鈴木氏も「他の集団を意識しつつ」又は「対立する関係にあった」根拠を示しておられない。確かに相互の贈答詩を検する限りでは両グループの交流を示す資料に乏しくは見える。

聞一多氏が「賈島」で示した次の様な見解も、対立とまではゆかなくとも、両者を別々の流れと理解していたようである。

這像是元和長慶間詩壇動態中的三個較有力的新趨勢。

這邊老年的孟郊、正哼着他那沙澀而帶芒刺感的五古、惡毒的呪罵世道人心、夾在呪罵聲中的是盧仝劉叉的「插科打諢」和韓愈的宏亮的嗓音、向佛考排髻。

那邊元稹張籍王建等、在白居的改良社會的大纛下、用律動的樂府調子、對社會泣訴着他們那各階層中病態的小悲劇。

同時、遠遠的在古老的禪房或一個小縣的廨署裏、賈島姚合領着一群青年人做詩……（三十七頁）

確かに兩門の作風には一見大きな違いがみとめられる様である。韓愈に対する「怙屈警牙」と、白居易に対する

“和平坦易” または “流麗安詳” という、よくいわれる古典的寸評が兩門の差を明確に示している。しかしそれがすぐに兩門の対立につながるかどうか吟味が必要であろう。また兩門の交流資料の乏しさがそのまま鈴木氏の云われる如く対立を示す事にも直ちには結びつかぬであろう。

先に挙げた沈氏一族の例でも、これまで報告されてきた以上の緊密な関わりが李賀との間にあり、また一方、元白らとの交游および文学の親近性を見る事が出来た。ここでもう一度、李賀の他の友人と白門とのつながりが検証出来ぬか試みてみよう。

崔 植 崔植が李賀の友人であった事は両者の詩文からは直接には伺われない。李商隱「李賀小伝」〔李義山文集〕⁽³⁰⁾ 卷四〕にある次の記載から知られるのである。これは李賀の姉の言葉として李商隱が引くものである。

所與游者、王參元・楊敬之・權璩・崔植輩爲密、每旦出與諸公游

崔植は字を公修といい、祐甫の子である。⁽³³⁾ 彼は元和二年（八〇七年）に翰林に入っており、この時、白居易もまた同時に翰林に入っている。後年、太和六年、白居易は彼の為に「祭崔相公文」〔白氏文集〕⁽³⁴⁾ 十、卷七十〕を書いて初対面からの交游をなつかしんでいる。

始愚與公同入翰林、因官識面、因事知心、……朝案同食、夜床並衾、綢繆五年、情與時深

崔植は長慶元年（八二一年）から四年（八二四年）にかけて穆宗の相をつとめ、太和三年（八二九年）に五十八才で亡くなっている。白居易が彼の為に起者した制・表四篇、それと先の祭文一篇ならびに詩三首が二人の交游を今に物語っている。

李賀の友人にしては偉くなりすぎている感はある。然しながら「全唐文」「全唐詩」や史書に同名の別人が存在せ

李賀と沈亜之

ず、時代も相当する以上、李賀の年長の友人であつた崔植が宰相になつた崔植と考えざるを得ない。所詮、これも人生、あれも人生なのであろう。「新唐書」⁽¹²⁾卷二〇三「文芸伝」下では、

與游者、權璩・楊敬之・王參元

と記して崔植の名を削っている。

権 璩 字は大圭。元和二年（八〇七年）の進士。「旧唐書」卷一四八、「新唐書」卷一六五に伝がみえる。権璩の名は先に引いた「李賀小伝」に挙げられていたが、すでに「李賀詩集」卷一に「出城、寄権璩・楊敬之」の詩がある。

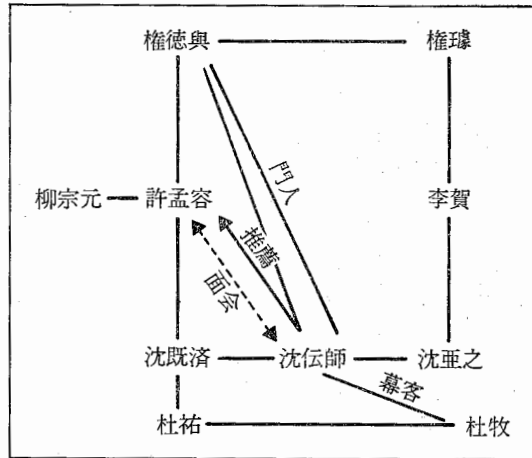
沈既濟の子、沈伝師の為に書いた行状（「樊川文集」⁽²⁵⁾卷十四）の中で、杜牧はこんな風に語っている。

（沈公）貞元末、舉進士、時許公孟容爲給事中、權文公爲禮部侍郎、時稱權許、進士中否、二公末嘗相聞於其間者、其年、禮部畢事、文公詣許曰、亦有遺恨、曰、爲誰、曰、沈某（傳師）一人耳、許曰、誰家子、某不知、文公曰、具言先少保名字、許曰、若如此、我故人（沈既濟）子、後數日、徑詣公、且責不相見、……明年中第、文公門生七十人、時人此公爲顔子

そしてここに登場する權文公・德興の子が、李賀の友人の権璩なのであつた。この関係をわかりやすく図示すると次頁の図ようになる。

沈伝師の身内に沈亜之がいた。「李賀小伝」には沈亜之の名は逸していたものの、こう図で整理してみると李賀の交友関係にはすじみちがあつた事が浮び上ってくるではないか。李賀の友人として散発的に名の挙げられていた権璩と沈亜之とは、彼等の父親の世代間ですでにつき合いのあつた人達なのである。

[沈伝師交遊図]



皇甫湜 字、持正はその文集に収める文学論を以て、韓愈グループの文学観を代表させられている人である。この点については既にふれた(二十七頁)。ここには白居易との交わりを端的に示す詩をあげておこう。

哭皇甫七郎中湜

1 志業過玄晏、詞華似禰衡

多才非福祿、薄命是聰明

5 不得人間壽、遺留身後名

涉江文一首、便可敵公卿

(「白氏文集」⁽¹⁾五・卷二十八)

他に「寄皇甫七」「訪皇甫七」(いずれも四・卷二十三)などが白居易の友情を端的に示す。

王参元 やはり「李賀小伝」に日頃の遊び仲間として挙げられている。

た一人である。柳宗元「河東集」⁽³⁴⁾卷三十三に収める「賀進士王参元」には次のような言及がある。

失火書云、僕自貞元十五年、見足下之文章、蓄之者蓋六七年。両者の息の長い交遊を考えてもよからう。

以上跡づけて来た様に、亜之を始めとする沈氏一族、また李賀の他の友人たちそれぞれにも、何がしか一つの関わりを白居易・元稹・王建・柳宗元などの側に見出す事が出来た。対立説は根拠をなさぬであろう。当時の文学者に、もし集団意識というものがあったとすれば、それは庇護を仰ぐパトロンと普段出入りする場所を共通にする仲間意識に支えられた、一種のサロンといった程度の意識ではなかったろうか。しかも、それぞれのサロンが他を排除する様な性格のものでなかった事は、これまでみてきた詩人たちの動きからも充分うなづける事である。

現存する資料による限り、李賀と白門との関わりを示す直接の証拠は発見出来ぬが、その事が李賀の文学と白門の文学との間に関わりを認めるのをさまたげるものではない。李賀の友人達による相互の伝聞は必ず存在したであろう。沈氏一族は李賀と白居易を中心とする文人グループとの接点にたっていたといえる。他の友人達もそれぞれ白門とつながりがあった。何よりも両者の文学形態の似通いが注意されねばならない。私は以下に白居易と李賀の文学を重ね合わせてみようと思う。

小説的発想の詩 宋・洪邁「容齋五筆」⁽³⁵⁾ 卷七に、白居易の「琵琶引」を論じた条がある。

白樂天琵琶行一篇、讀者但羨其風致、敬其詞章、至形於樂府、詠歌之不足、遂以謂眞爲長安故侶所作、予竊疑之、唐世法網雖於此爲寬、然樂天嘗居禁密、且謫官未久、必不肯乘夜入獨處婦人舡中、相從飲酒、至於極彈絲之樂、中夕方去、豈不虞商人者它日譏其後乎、樂天之意、直欲據寫天涯淪落之恨爾

白居易の「琵琶引」には「長恨歌」と並んで注目すべき現象が認められる。二作ともに物語的な構成と語り口をもっている点である。「琵琶引」には長い序がついていて、作者がいかにも現実に体験した事のように書きなしてある。しかし注意して読むと、この序には、序に通常の具体的なデータが記載されていない事に気がつく。白居易には

この時送別した友人のあった事は知られていない。

「自氏文集」^①二・巻十に収める「夜聞歌者」という作品がある。これも題下注に「宿鄂州」とあるはかは具体的なデータには一切ふれず、その点で「琵琶行」と甚だ相い似た状況設定の詩となっている。

夜聞歌者

1 夜泊鸚鵡州、秋江月澄澈

鄰船有歌者、發調堪愁絕

5 歌罷繼以泣、泣聲通復咽

尋聲見其人、有婦顏如雪

9 獨倚帆檣立、娉婷十七八

夜淚似眞珠、雙雙墮明月

13 借問誰家婦、歌泣何淒切

一問一霑襟、低眉終不說

これは娉婷たる十七・八の歌者と自己とを同一視した感情移入が目立つ作品である。描写は細かく、そして描写の細かさに見合う分だけ、いかにも作者の現実体験を書きとめた詩の如く見せかけているのである。これも洪邁が「琵琶引」詩ですでに気付いているような、作者の天涯地角の感を際立たせる為に案出した舞台という事なのであろう。次に李賀の「馮小憐」(巻三)をみよう。

馮小憐

李賀と沈亜之

1 灣頭見小憐、請上琵琶絃

破得東風恨、今朝值幾錢

5 裙垂竹葉帶、鬢濕杏花烟

玉冷紅葉重、齊宮妾駕鞍

作者の自己投影でもある馮小憐には、一人の齊宮に奉仕した女性の数奇な流浪譚が暗示されている。ことに結句の「齊宮ニ在リテハ妾、鞍ニ駕セシモノヲ」という彼女の詠嘆にみちた回想から、彼女の自述が始まる処で詩は断ち切られている。これから繰りひろげられてゆく長編物語りの発端部分でこの詩はあるようだ。あくまで作者がそのままを伝えてきたのだといわんばかりのナラティブな語り口に、物語りの作者の傀儡師的役割りを、または舞台裏からの視点をみてとれるのである。

「蜀国絃」（「李賀詩集」巻一）も、何か或る事情——それは物語りの進行につれて読者に明示される性質のものであろうが——の為、古里を離れて月あざやかな瞿唐峽をよぎる美しい女の姿を、したたる涙のくれないに結晶させた優作であるが、これまた無限に展開してゆく可能性を孕んだ物語りの断章と見られるのである。

李賀が、例えば「蘇小々歌」（十二頁）に於て、南朝の美妓を追慕しながらいつしか彼女と一体化してこの世ならぬ世界へと我々を飛翔させつつ、詩人のイマジネーションをふくらませる時、白居易はあくまで現実世界に踏み止どまりはするが、その現実の内に、詩人には確かな手ごたえのある非現実を構築していたのであった。

白話的語調の詩 白門の詩には白話的語調があるとは、すでに注意されていた事であった。蘇雪林氏は「唐詩概論」に於てこの事を逆の証拠に用いて、こんな風にも述べている。

二王（王建・王籍）詩則坦易、甚至用白話寫、可說是白居易一派（傍点筆者）。

「李賀詩集」卷四に収める「苦篁調嘯引」は、伝奇小説的なテーマと共にその語り物的な語り口で、白居易らの詩との非常な親近感を印象づけるものである。

苦篁調嘯引

1 請說軒轅在時事

伶倫採竹二十四

伶倫採之自崑丘

4 軒轅詔遣中分作十二

伶倫以之正音律

軒轅以之調元氣

當時黃帝上天時

8 二十三管咸相隨

唯留一管人間吹

無德不能得此管

此管沉埋虞舜祠

白居易の小説的と評される詩篇（例えば「琵琶行」）が委曲を尽した叙述に傾くのと、李賀の賦的長詩例えば卷二「惱公」や卷三「昌谷」などに典型的な刻画意欲とは、恐らく相応するものなのであろう。

白居易と伝奇小説　白居易の弟の白行簡、また友人で詩人でもある元稹らは、白居易を中心とする文学交遊圈の中で伝奇作家としても数えられているのだが、白居易は今日の評価では詩人とされ伝奇の作ありとはされていない。しかしながら白居易にも伝奇に傾斜した作品がない訳ではない。例えば「白氏文集」⁽¹⁾七・卷四十三に収める「記異」と題する作品がある。

記異

華州下邽縣、東南三十餘里、曰延年里、里西南有故蘭若、而無僧居、元和八年秋七月、予從祖兄曰暉、自華州來訪予、途出於蘭若前、及門、見婦女十許人、服黃綠衣、少長雜坐、會語於佛屋、聲聞于門、兄熱行方渴、將就憩、且求飲、望其從者蕭士清、未至、因下馬、自繫韁於門柱、舉首、忽不見、意其退藏於窻闥之間、從之、不見、又意其退藏於屋壁之後、從之、又不見、周視其四旁、則堵牆環然無隙、覆視其族談之所、則塵壤四幕然、無足迹、繇是知其非人、愕然大異之、不敢留……

話はこれで終らず、更に後日談が附せられている。里人の王胤なる者が、この荒れ寺のすぐ傍に引越してきて起った事である。

(王胤) 方徙居於蘭若東百餘步、蒿牆屋、築塲藝樹、僅畢、明日而入、既入、不浹辰、而胤死、不越明、而妻死、不逾時、而胤之二子與二婦一孫死、餘一子曰明進、大恐懼、不知所爲、意新居不祥、乃撤屋拔樹、夜徙去、遂獲全焉……明年秋、予與兄出遊、因復至是、視胤之居、則井湮竈夷、閭然唯環牆存、里人無敢居者

王胤が何故、この様な祟りを受けねばならなかったのか因果が不明のままに、この話は甚だ後味の悪い印象を読者に与える。もし奇を伝える興味のひとつに、聞く者の神経をさかなでする狙いがあるとすれば、この話はまさしく成

功しているといえよう。

またこの話の出だしは白行簡「三夢記」(「説郭」⁽³⁶⁾卷四)の出だしと同じ設定となっている。

三夢記

天后時、劉幽水爲朝邑丞、常奉使、夜歸、未及家十餘里、適有佛堂院、路出其側、聞寺中歌笑歡洽、……劉俯身窺之、見十數人、兒女坐雜、羅列盤饌、環繞之而共食、……

伝奇小説の特色のひとつとして、類型的なパターンを持つ点が挙げられる。汪辟疆氏は「唐人小説」に於て「三夢記」に注して、「河東記」の「独孤遐叔」(「太平広記」卷二八一)や、「纂異記」の「張生」(同書卷二八三)などを類話として挙げている。白居易のこの作品もまさしく伝奇の類型に収まるものといえよう。

沈亜之と元・白の詩風との連関についての内山氏の指摘は既に紹介した(二十八頁)。白居易の文学に伝奇小説が一部分をなす例をいま我々は見た。白門伝奇作家は白行簡・元稹・陳鴻などに限定する必要はないであろう。

一方、李賀の文学はその伝奇的性格、および作品の或るものに顕著な、ナラティブな語り方に於ても勿論のこと、最も注意すべきは、これまで見てきた如く虚構を核としてふくらませる点に於て、白居易らの文学と通い合うものである。「欲雕小説干天官」とは卷二「仁和里雜叙皇甫湜」にみえる李賀の句である。散文作品を一篇も残さなかった李賀が己の作る韻文を「小説」と呼びなす時もあつた事をこの句は示している。勿論この場合の小説とは現代の我々が意識する小説(ノヴェル)ではなく、「小ナル説」の義を脱しないものではあるが、詞客(ポエット)の作るものの中に小説があるという自己認識は、何としても矛盾にみちた自己嘲笑である。

韓門の文学と白門の文学 中唐のおどろおどろしさを背景として胎生した怪奇趣味は、文学表現に於ては伝奇と詩とに二分して噴出したものの様である。

ゴツゴツしたもの、トゲを含んだものに美を認め、それをみずからの文学に写そうとする表現態度に於て、韓門はたしかに目立っている。盧仝の「月蝕詩」(「玉川子詩集」卷一)はその代表である。

然し乍らこの視点を日常生活の中に向けて作品を作るとするなら、伝奇文学が浮び上って来ることになる。韓愈の「猫相乳」(「昌黎先生集」卷十四)は、韓愈が上京したばかりの頃、世話になった北平王馬燧宅で起った事件(というよりは一寸した日常の出来事)を書きとめた作品である。これは先程の白居易の、寺庭に宴会を幻覚した話より、一段と日常生活のレベルに近づいたものである。

白門に於る伝奇と韓門に於る蛇神詩とは、同一の発想と同一の意識を基盤として二つに分化したもので、彼等の双方にとって実は等価な文学表現であったように思われる。この両門の文学には共通する点が甚だ多い。以下にそれを検討しよう。

外的共通要因 韓門・白門ともに進士出身の人達により構成されていた。政治上、文学上の転換期であった中唐期は、何よりも先ず経済的な変換期であり、両門とも新興の中層地主階級出身でもあった。

商業経済の発展とそれに伴う都市文化の成熟は、この時期の一特徴である。両門の文学が土壌としてゐるのはまさしく、この都市であり、都市が両門へ珍聞奇談を供給した源であった。そしてまた狹斜の地が彼等の文学のあるもの——小説やことに歌詞などの新興の文学——を伝播させる所でもあった。両門が共通な発想と生活感覚(または生活基盤)を持っていたであろう事は想像に難くない。しかしながら、この様な点はあくまで外的要因にすぎず、彼等の

文学に共通して流れる諸点の方がより重要であらう。

内的共通要因

① 空想

蛇神詩も伝奇もともに空想をその文学の核としている。従って出来上った作品は虚構を骨格とする。これは創作態度における共通点である。李賀にあってはそれが幻想あるいは幻視にまで高まり、より安定した精神構造をもちえた他の伝奇作家にあっては想像の地平にとどまった事は、彼我の作家的素質の差というべきであらう。この点については前言したので繰り返さない。

幻想ないし想像に関して、他の作家にない李賀の特性を求めるとすれば、それは李賀にあっては幻想が現実を侵食し、(李賀にとっての)事実となってしまう点であらう。日常の垢に幾重にも蔽われて意識下に遮閉された世界が、李賀にあっては外界にめくれ出てくるのである。内壁の蠕動は白日の光にさらされて奇怪であり、美しいまでに醜悪である。李賀が我々に露呈してくれた淵の奥深さを「鬼」というのであれば、それはまさしく正当な意味での李賀の鬼を示す才能を評価した言葉といえよう。その「鬼」とはそしてこの時、李賀一人の鬼ではなく、我々全てが分有する鬼の謂となるのである。

両門に虚構が共通する事を、もう一度、別な側面から点検してみたい。盧仝は李賀と作風が似通うとされる詩人である。韓門に数えられている。盧仝に対話で構成した詩がある。

蕭宅二三子贈答詩二十首

客贈石

李賀と沈亜之

1 竹下青莎中、細長三四片

3 主人雖不歸、長見主人面

石讓竹

1 自顧撥不轉、何敢當主人

3 竹弟有清風、可以娛佳賓

竹答客

1 竹弟謝石兄、清風非所任

3 隨分有蕭瑟、賓無堅重心

石請客

1 竹弟雖讓客、不敢當客恩

3 自慙埋沒久、滿面蒼苔痕（以下省略）

〔王川子詩集〕^分卷一

この詩では、石・竹・蘭・蝶・蝦蟇などの登場物が自由に物を話す擬人化の手法が施されている点でも興味を引くが、その為に一層はつきり、この対話詩は架空のものと読者に知れてしまうのである。

さきに取り上げた白居易の「琵琶引」⁽¹⁾をもう一度眺めてみよう。この詩の全体の構成は、

1 潯陽江頭夜送客

楓葉荻花秋索索

主人下馬客在船

4 舉酒欲飲無管絃……

という詠い出で、場所と時間および登場人物が紹介され、次いで

8 主人忘歸客不發

尋聲闌問彈者誰

10 琵琶聲停欲語遲

移船相近邀相見

で、ヒロインの登場とその弹奏の描写。つづいてそのあと、

39 沈吟放撥插絃中

整頓衣裳起斂容

41 自言本是京城女

家在蝦蟇陵下住

以下、客の問いに対する答えという形で長々とセリフが展開される。

人物の会話を文学作品の中に用いるのは、殊に登場人物の口吻（「琵琶引」の場合には妓女の口吻）を写し出した場合には、迫真の効果をうむ。「史記」に挿入された対話のあげる効果には抜群のものがあつた。この事から容易に推察出来る事がひとつある。意図して対話を詩中に設定する事は架空の見破られぬ為の絶好のカモフラージュとなるだろう。読者はコロッと引きこまれて、江州司馬と共に青衫をうるおす結果となるのである。

李賀と沈亜之

「李賀詩集」卷三「昌谷讀書、示巴童」及び「巴童答」もまた意図して設定した対話のあげる効果を狙った作品である。

昌谷讀書示巴童

1 蟲響燈光薄、宵寒藥氣濃

3 君憐垂翅客、辛苦尚相從

巴童答

1 巨鼻宜山褐、龐眉入苦吟

3 非君唱樂府、誰識怨秋深

② 異常なテーマ。

蛇神詩、伝奇小説に共通した事象であるが、彼等の扱う題材には異常なテーマが目立つ。この点については既にふれたので繰り返さない。

③ 夢。

虚構のかけ橋として夢を作品中に取り込む事には種々の利点が考えられる。

先ず、夢を導入に作者も非日常の世界に入りこむと同時に、読者を容易に異次元に引きずりこむ事が出来る。

次に、作者が作品で述べる事実は、夢中の事実であるという弁解が成り立つ。夢中の所産故、杜牧が「李賀詩集 鈔」で評した如く、いかなる「虚荒誕幻」も許容されるであらう。虚荒誕幻が却って事実となるのである。またこれを一段逆用すれば、直叙しえぬ事実であるからこそ夢というキャプションを被せるというケースもありうるであらう。

虚荒誕幻だから事実なのである。それ故、夢は伝奇小説の重要なパターンのひとつになっている。「三夢記」(白行簡)、「異夢録」「秦夢記」(沈亜之)など、標題からして既に夢をうたった作品がある。また標題にこそ出していないが、「枕中記」(沈既濟)、「南柯太守伝」(李公佐)等も夢が重要なモチーフとなっている。

夢は、そこで当然、この時代の詩人達の作品にも多用される結果となった。韓愈の「記夢」は先に紹介した(六頁)。盧全に、

1 客行一夜秋風起

2 客夢南遊渡湘水

と詠い起される「秋夢行」(「玉川子詩集」⁽³⁷⁾ 卷二)がある。

この作品で、夢裏に詩人と詩人に手引きされた我々とは、万頃銀色たる湘水のほとり、娥皇・女英らと徘徊し恐らく宴げしたようだったが、ふと夢驚くと時は中宵、霜に雪なす肌えを想い、纖月に眉撫を想う計りなのである。この詩、夢による虚構へのスムーズな移行という効果ばかりでなく、夢幻世界があくまで冷徹である点に、李賀のメタリックに冴えた、いてつく感触をもつ天上世界との関連をおもわせるものがある。

李賀には、その詩人的体質として、物と物とを比喩の媒介なしに直接つなげてしまう特質の為、ことさらに夢を虚構の媒介に用いた例は少ない様である。それでも「夢天」(五頁既引)はその恰好の例であろう。他にも「李馮筌篋引」(卷一)に、

11 夢入神山教神嫗

12 老魚跳波瘦蛟舞

李賀と沈亞之

や、「宮娃歌」(卷二)に、

9 夢入家門上沙渚

10 天河落處長州路

のような句が見える。どちらも夢で入るのである。

白門の詩に於て夢はどの様であらうか。元稹は夢の効果を充分心得ていた作家と思われる。夢を用いた詩が散見する。いま「才調集」⁽³⁸⁾卷五に収める「夢遊春七十韻」は、四部叢刊が影印した明・東吳董氏刊本に逸する詩であるが、

1 昔歲夢遊春、夢遊何所遇

3 夢入深洞中、遂果平生趣

と述べつつ、魂をとろかす雲雨境での体験を細々と夢に書きなしている。夢もこうなると都合の良い隠れ蓑である。元稹は他に「夢井」(卷九)や「夢上天」(同)などで夢を効果的な小道具としている。

もう一例、「元氏長慶集」⁽³⁹⁾卷七「感夢」を見よう。夢ばかりでなく、この詩にも対話の手法が採用されている事も注意を引く。非常に長い詩なので前半部のみ引用する。

感夢 夢故兵部襲尚書相公

1 十月初二日、我行蓬州西

三十里有館、有館名芳溪

5 荒郊屋舍壞、新雨田地泥

我病百日餘、肌體顧若割

- 9 氣填暮不食、早早掩寶圭
陰寒筋骨病、夜久燈火低
- 13 勿然寢成夢、宛見顏如珪
似歎久離別、嗟嗟復悽悽
- 17 問我、『何病痛、又歎何栖栖』
答云、『痰滯久、與世復相睽』
- 21 重云、『痰小疾、良藥固易擠
前時奉橘丸、攻疾有神功
- 25 何不善和療、豈獨頭有風』
殷勤平生事、歎曲無不終
- 29 悲歡兩相極、以是半日中
言罷相與行、行行古城裏
- 33 同行復一人、不識誰氏子
逡巡急吏來、喚呼『願且止』
- 37 馳至相君前、再拜復再起
啓云、『吏有奉、奉命傳所旨
- 41 事有大驚忙、非君不能理』

李賀と沈亜之

答云、『久就閑、不願見勞使

45 多謝致勤勤、未敢相唯唯』

我因前獻言、『此事愚可料

49 亂熱由靜消、理繁在知要

君如冬月陽、奔走不必召

53 君如銅鏡明、萬物自可照

57 願君許蒼生、勿復高體調』

相君不我言、願我再三笑

行行及城戶、黯黯餘日輝

相君不我言、命我從此歸

不省別時語、但省涕淋漓

65 覺來身體汗、坐臥心骨悲

閃閃燈青壁、膠膠雞去埒……

この作品は虚構の枠組みに夢を用いた詩の中でも画期的なものである。道具建てとして夢が用いられた詩では、夢を見た（という設定の）作者は読者を案内して別世界をのぞいたり、また作者が夢で誰かと面会したりする程度が通常なのであった。ところがこの詩では、誰とも分らぬ第三の人物が同行して古城を共に歩いており、その処へ下吏が追いかけてきて、某氏——夢をみた何日か後、無聊を慰める為僧と談じていて、裴度であったとさとする——と対話す

る、という甚だ入り組んだ構造となっている。これはスタイルこそ韻文であるもののまさしく伝奇小説の構成である。夢の中がひとつの完全な世界を構築しているのである。読む者は容易に「枕中記」の世界を連想するであろう。元稹にあっては夢の世界もまた、日常世界の反転あるいはそのイミテーションである所、李賀の夢幻世界と分かれる点でもある。

伝奇の文壇 元和期を支配した異常なものへの興味が伏流としてあり、それが元和期の文学をして非日常の世界、或いは虚構を骨組みとする文学へと推進させた。

李賀の周囲には、奇なる文学を支持しそれを己の文学観とし、条件さえあれば伝奇の作にみずから筆を染めた友人が存在した。それが李賀の文学の方向を大きく規定していった事は間違いない。李賀の文学を培養した周囲の友人達とは、これまで検討した様に、二次交流・三次交流までも想定すればかなり広範囲にわたる事が推定できる。李賀と白門との直接交渉の跡はむしろ証明されなくて差しつかえないであろう。ひとつには李賀の短命——詩人としての生命はわずか三年間をヤマとする——が大きな障害となったのもあろう。我々には李賀周辺と白門、及びその文学的共通性を知るだけで充分である。

清水茂氏は「杜牧と伝奇」（『中国文学報』第一冊）に於て、「伝奇の文壇」というものを想定しておられる。氏はこの様に述べておられる。

牛僧孺は、晩年、洛陽にやしきを作り、そこでいつも詩人白居易らと吟詠し政治に乗り出す野心を持たなかったというから、白居易のグループの伝奇作家たちと親しかったのではなからうか。さらに想像すれば、彼のサロン

李賀と沈亜之

ではそういう伝奇作家が集まり、伝奇の文壇が出来ていたのではなかったのだろうか。

氏は白居易のグループとして、白行簡・元稹・李公佐・陳鴻などの名を挙げておられる。伝奇の文壇は白門だけにとどまるものではなかったと私は考える。牛僧孺と沈伝師とは杜牧を介してつながる事が可能である。その延長上に沈亜之を連結点として、韓門・白門の双方のメンバーを含めた処にひとつの俯瞰図が描かれねばならない。中唐期の文学図式は、韓白二元論から自由になるべき時期に来ていよう。はじめに挙げた「唐国史補」の評語に於て、李肇が韓愈・樊宗師・張籍・孟郊・白居易・元稹らの詩風を総括して、「俱名爲元和体」といっている事は、まことに示唆的といえるのである。

註

- (1) 「津逮秘書」十集
- (2) 改訂版「中国文学發展史」第二冊 三九一頁
- (3) 民国六十年国立中央圖書館(台北)景刊「李賀歌詩編」四卷、集外詩一卷
- (4) 景静嘉堂文庫藏宋刊本
- (5) 景東雅堂本
- (6) 珠原作疎、據日本刊本(劉辰翁評点、吳正子箋註)改。
- (7) 南宋本、元刊本朝鮮刊本同作歌。日本刊本作墓。王琦彙解本亦作墓、与詩意合。
- (8) 吹雨二字原乙転。南宋本、朝鮮刊本同。今據宋槧樂府詩集並日本刊本改。元刊本作雨晦。
- (9) 上海人民文学出版社「李賀詩歌集注」所収、姚文燮注「昌谷集」又王琦彙解「李長吉歌詩」
- (10) 粵雅堂叢書初編
- (11) 景宋本
- (12) 百衲本景刊宋槧本
- (13) 景談愷本
- (14) 柏、「全唐詩」(中草書局排印本)卷三百一誤作柏。
- (15) 中華書局排印本「王建詩集」卷九
- (16) 日本刊本蔣之翘註「唐韓昌黎集」
- (17) 百衲本
- (18) 津藩日本刊本
- (19) 荒井健氏「杜牧」(筑摩書房)二四九頁以降。

(20) 官板

(21) 張全恭「唐文人沈亞之生平」(文学)一九三四・2巻6号)の考証に従う。

(22) 葉氏刊本

(23) 錢鍾書氏はこの感賞を「長吉詩屢悲光陰之速與年命之促」という一節をたてて分析している(「談芸錄」六十九頁)。

(24) 統古逸叢書景印宋本

(25) 四部叢刊景印明刊翻宋本

(26) 叢書集成初集

(27) 嘉慶七年金陵書局刊本

(28) 南菁書院叢書刊本

(29) 景刻氏嘉業堂刊本

(30) 四部叢刊景旧鈔本

(31) 花房英樹氏「白氏文集の批判的研究」による。

(32) 景吳興先哲遺書本

(33) 「新唐書・宰相世系表」では嬰甫に作る。

(34) 景世采堂本

(35) 四部叢刊統編景印明弘治活字本

(36) 商務印書館據明抄本排印

(37) 四部叢刊景印旧抄本

(38) 四部叢刊景印述古堂景宋本

(39) 四部叢刊景明刊本

(40) この部分は引用では省略した、後半部の詩にあたる。